

## 見込み上の親の「態度」や「理由」に基づいたアプローチの整理

川崎, 優  
九州大学

<https://doi.org/10.15017/7178794>

---

出版情報：哲學年報. 83, pp.59-77, 2024-03-18. Faculty of Humanities, Kyushu University  
バージョン：  
権利関係：



# 見込み上の親の「態度」や「理由」に基づいたアプローチの整理

川崎 優

## はじめに

本論文では、生殖の選択について道徳的に評価するためのアプローチとして、見込み上の親の「態度」や「理由」に着目するアプローチを扱う先行研究の整理を行うことを目的とする。

生殖の選択について道徳的に評価するためのアプローチとして、これまで様々なアプローチが講じられてきた。特に、1986年に、デレク・パーフィット (Derek Parfit) が非同一性問題の存在を指摘して以来、非同一性問題を回避するような仕方では、生殖の選択について道徳的に評価することができるようなアプローチが模索されてきた。非同一性問題とは、異なる選択や行為の結果生まれる子どもは異なる存在であるという事実から生じる問題である。例えば、障害のある子どもをもつか、障害のない子どもをもつかを選ぶことができるような状況で、障害のある子どもをもつことを選択するようなケースを想像しよう。このような選択について、無危害原則の観点から評価しようとするとき、私たちは非同一性問題に直面することとなる。なぜなら、障害をもって生まれる子どもは、その障害によって（その障害をもって存在させられることによって）より悪い状態にされている、すなわち、障害を加えられているとは言えないからである。

このように無危害原則という伝統的に支持されてきた原則の観点から、生殖の選択について、道徳的に評価することが困難であることが明らかになったことで、代替りのアプローチが求められるようになったという背景がある。非同一性問題を解決するアプローチとしては、非人格的アプローチと呼ばれる功利主義的な戦略が有名であるが、別の困難を抱えていることがすでに指摘されている (Parfit [1986], Brock [1995], McMahan [2005])。したがって、無危害原則、非人格的アプローチに代わる、さらなる新しい他のアプローチが求められているのが、当該分野の現状である。

本論文で扱う「態度」や「理由」に着目するアプローチは、そのような比較的新しいアプローチとして位置づけることができるだろう。これらのアプローチでは、「子どもへの危害」という観点から離れることで、非同一性問題を回避するような仕方、生殖の選択について道徳的に評価することができる。本論文では、これらのアプローチの妥当性について今後検討するための準備段階として、先行研究の議論の整理を行う。

本論文の流れは、以下の通りである。第1節では、見込み上の親の「態度」に着目するアプローチとして、DeGrazia [2012] と Boonin [2014] における議論の整理を行う。第2節では、見込み上の親が子どもをもつ「理由」に着目するアプローチとして、Wasserman [2005, 2009, 2015] の議論の整理を行う。第3節では、「態度」や「理由」に着目するアプローチを支持できる可能性に大きな影響を与えうる論点を扱う。ここでは、McMahan [2009] と Wasserman [2015] の議論の整理を行う。

## 1. 親の態度への着目

生殖の選択について、道徳的に評価するためのアプローチとして、その選択を行う見込み上の親の「態度」に着

目するアプローチがある。このアプローチでは、ある生殖の選択が、不適切な態度を示しているという観点から、その選択の道徳的不正さを説明しようと試みられる。ここでは、そのようなアプローチに位置付けられる議論として、DeGrazia [2012]における議論と、Boonin [2014]における議論を紹介する<sup>1)</sup>。

### 1-1. デグラジアの議論

デイビッド・デグラジア (David DeGrazia) は、議論の中で、「生殖の選択は、子どもへの不適切な関心を表出することによって、その子どもを不当に扱う」という主張を紹介している (DeGrazia [2012:180])。生殖の選択が、子どもへの不適切な関心を表出するケースとして、次のケースが挙げられる。

医師は、患者とその夫に、妊娠を試みる時期を遅らせるべきだと説明した。なぜなら、「患者である」その女性性は、彼女が妊娠する子どもは皆、軽度の知的障害をもつような医学的状态であったからだ。もし彼女が1ヶ月間、安全な薬を服用するならば、彼女はのちに健康な子どもを妊娠し、出産することができる。彼女とその夫はこのアドバイスに従わなかったため、彼女たちは2週間後に妊娠に成功し、軽度の知的障害のある子どもを出産した。(Ibid. [174])

デグラジアは、このケースのカップル(見込み上の親)は、この子どもに利益をもたらすために、障害のある子どもが生まれるような選択をしたわけではないことは、明らかであると主張する (Ibid. [180-181])。デグラジアの説明に従うと、その見込み上の親の行為は、彼女たちの生殖の選択がもたらす結果(障害のある子どもが生まれるという結果)について、「非常に思慮に欠ける態度 (a highly cavalier attitude)」を表出しており、彼女たちの子どもに対す

る「深刻な関心の欠如 (a profound lack of regard)」を表出している。(Ibid. [181])。そして、この「非常に思慮に欠ける態度」や「深刻な関心の欠如」が、「子どもへの不適切な関心」であると考えると、このケースの見込み上の親の生殖の選択は、子どもへの不適切な関心を表出することによって、その子どもを不当に扱っていると考えられる。

ここで問題となっているのは、「障害のある子どもが生まれるという結果」そのものではなく、そのような結果についてカップルが十分に考えることができず、その子どもが抱えるだろう苦しみや幸福について、十分な関心をもつことができなかつたことである。

逆に言えば、同じ「障害のある子どもが生まれるという結果」をもたらす選択であっても、その見込み上の親が、その選択の結果、その子どもが障害と共に生きていく中で経験しうる苦しみや幸福について十分に考えた上で、その子どもを産む決断をしたのであれば、その見込み上の親は、必ずしも非常に思慮に欠ける態度や深刻な関心の欠如を表出しているとは言えないかもしれない。

このようなデグラジアによる分析は、見込み上の親の「態度」に着目するアプローチとして位置付けられるだろう。

## 1-2. ブーニンの議論

デイビッド・ブーニン (David Boonin) は、議論の中で、「行為が不正でありうるのは、それがその行為を遂行した人の好ましくない性格特性を表しているからであり、それはたとえ行為そのものが誰も悪くしていないとしてもそうである」という主張を紹介しており、このようなアプローチを「徳倫理的アプローチ」と呼ぶ (Boonin [2014:cl6-37])。ブーニンが想定するケースは、次のようなケースである。

「……」(ウィルマは)健康診断のために医師の元へ行ったところ、医師は彼女に「良いニュースと悪いニュースがある」と伝えた。悪いニュースは、現状、もしウィルマが妊娠するならば、彼女の子どもは障害をもつだろうというものだ。医師は、その障害がどのようなものであるか厳密には言うことができないが、その障害について3つのことをウィルマに伝えることができた。第1に、それは明らかに、人のDOL<sup>1</sup>にかなりネガティブな影響をもつタイプの障害だろう。これが「ネガティブな影響をもつのは」その障害そのものに本質的な特徴が理由であったり、ウィルマのいる社会が、その障害をもつ人々を差別したり、十分に対応できなかったりするからであったり、あるいは、これらの理由が組み合わさることによって、そうなりうる。第2に、たとえある生が、完全に存在しない(状態)よりも悪い状態であることがありうるとしても、この特定の障害は明らかに、その子どもの生を、完全に存在しない(状態)よりも悪い状態にするほど重篤ではないだろう。ゆえに、その障害は決して些細なものではないが、それにもかかわらずその子どもの生は、明らかに生きる価値をもつ。最後に、障害は不可逆的だろう。その影響を取り除く、あるいは和らげる方法は存在しないだろう。

良いニュースは、ウィルマはこれが起こらないようにすることができるというものだ。もし彼女が、妊娠する前の2ヶ月間、1日1回とても小さな錠剤を飲むならば、彼女の子どもは完全に健康な状態だろう。その錠剤を飲むのは簡単で、副作用もなく、「それは」彼女の健康保険によって支払われるだろう。ウィルマは状況についてのすべての事実を完全に理解した上で、妊娠前の2ヶ月間、1日1回薬を飲むことは、あまりに煩わしいと判断したため、錠剤を投げ捨て、すぐに妊娠することを選んだ。この選択の結果、彼女の子どもは、重篤で不可逆的な障害をもって生まれた。(Ibid. [ch1:2])

ブーニンが示すケースは、デグラジアが示すケースと比べて、より詳細な説明がなされているという違いはある

ものの、一定期間薬を飲んで、妊娠を遅らせるといふ比較的簡単で安全な方法によって、障害のない子どもを産むことができたにもかかわらず、あえて障害のある子どもが生まれるような選択をしたという点は、共通している。

ブーニンの徳倫理的アプローチに従うと、このケースにおける見込み上の親であるウィルマの行為は、「他者の苦しみに対する無関心さ」という性格特性 (the character trait of insensitivity)」という悪いものを示しているため、道徳的に不正だと考えられる (Ibid. [ch6:37])。

### 1-3. 小結

以上のように、デグラジアとブーニンの各議論は、想定上のケースにおける見込み上の親の選択が、「子どもへの不適切な関心」や「好ましくない性格特性」を示しているという点から、その選択の道徳的不正さを説明しようとして試みているという点で、共通している。

また、デグラジアの議論では、「子どもへの不適切な関心」として、「子どもへの関心の深刻な欠如」が、ブーニンの議論では、「好ましくない性格特性」として、「他者の苦しみに対する無関心さ」という性格特性」が挙げられている。このように、いずれの議論も、子どもへの関心、特に子ども (他者) の苦しみへの関心が欠けている・ないことを、問題のあるものとして見なしているという点でも共通していると言える。

デグラジアの説明では、「関心」や「態度」といった表現が用いられている一方で、ブーニンの説明では、「性格特性」や「徳」、「無関心さ」といった表現が用いられている。なお、DeGrazia [2012] でも、「この」での非難の対象は、徳の欠如であり、それは悪い態度を通じて表出される」(DeGrazia [2012:181]) という記述がなされている箇所もあることから、デグラジアの議論についても、ブーニンの議論と同様に、徳倫理的なアプローチだと考えることもできるだろう。

「関心・無関心」、「態度」、「性格特性」、「徳」など、表現は多岐に渡るものの、議論の構造として、行為そのものではなく、行為者自身がつ性質のようなものに着目しているという点は、共通していると考えられる。本論文では、基本的にこれらの表現を、いずれも置き換え可能な表現として見なし、今後は主に「態度」という表現を中心に利用するものとする。そして、デグラジアとブーニンの各議論は、いずれも、見込み上の親の「態度」に着目するアプローチとして位置付けられるものとする。

## 2. 親の理由への着目

前節では、生殖の選択について、道徳的に評価するためのアプローチとして、その選択を行う見込み上の親の「態度」に着目するアプローチについて確認した。このようなアプローチに対して、デイビッド・ワッサーマン (David Wasserman) は、「態度」に着目しつつも、それ以上に、見込み上の親が子どもをもつ「理由」の重要性を指摘している。この場合は、Wasserman [2005, 2009, 2015] における議論を紹介する。

### 2-1. ワッサーマンの議論

ここで、より悪い見込みをもつ子どもをもつか、より良い見込みをもつ別の子どもをもつかを選ぶことができるような状況を想定する。(なお比較的簡単に安全な方法で、より良い見込みをもつ別の子どもをもつことができるものとする。) このような状況で、より悪い見込みをもつ子どもをもつ選択をする見込み上の親は、より悪い見込みをもつて生まれる子どもに対して、不十分な関心 (deficient concern) を示していることは、ワッサーマン自身も認めているようである (Wasserman [2005:144])。このような分析をしている箇所が、論文文中に見受けられることが、ワッサーマン

が、「態度」にも着目していると考えられる理由である。

しかしその一方で、ワツサーマンは、もし見込み上の親がその子どもの苦しみに対して無関心 (insensitive) であるように思われるならば、それは単純に、その見込み上の親がそのような決断をした背景や理由に関する詳細な説明が不足しているからではないかという指摘をしている (Ibid. [146])。そのような説明が不足している場合、見込み上の親の選択は、明らかにひねくれている (perverse) ように思われるというのが、ワツサーマンの主張である (Ibid.)。

つまり、ワツサーマンは、生殖の選択についての道徳的評価をするにあたって、見込み上の親の「態度」に着目すること自体は否定していないものの、その親の態度が、適切な態度か、不適切な態度であるのか判断するためには、その見込み上の親の背景的事情や子どもをもつ理由が重要な役割を果たすと考えているようである。

確かに、先程のデグラジアとブーニンのケースを思い返してみれば、いずれも問題となる事柄の本質的な構造は同じだが、各ケースにおける見込み上の親に対する印象は、やや異なるかもしれない。いずれのケースも、あえて障害のある子どもが生まれるような選択がなされたという点で共通していたが、ブーニンのケースのほうがより詳細な説明がなされていたという違いがあった。薬が保険対象であることや、見込み上の親が薬を飲むことを「煩わしい」と感じていたことなど、より詳細な情報が分かることで、ブーニンのケースの見込み上の親の方が、デグラジアのケースよりも、より道徳的に問題のある仕方で行っているような印象を与えるかもしれない。このように、問題となるケースについての情報量次第で、そのケースに対する印象が変わりうる可能性については、ワツサーマンに同意する。

また、ワツサーマンが、理由を重視していることは、次の一節からも明らかである。

最も妥当な役割道徳性 (role morality) は、子どもが生きる価値のある生をもつことが見込まれる限り、(そして、その親が、「……」愛情と適切なケアを与えうる限り) 親がもつ子どもの種類に関して、ほとんど制約を加えることはない、と私は論じる。それが要求するのは、人が子どもを産むときに、彼らが部分的に特定の理由から、すなわち、これらの子どもの利益 (good) に関係する理由から、そうすることである。すべての見込み上の親は、彼らの子どもが、「……」重大な困難——死、喪失、フラストレーション、苦痛——に直面することを、予期すべきである。彼らは、彼らの子どもを、これらの困難にさらすという決断を、正当化できなければならぬ。そして、彼らは、彼らがこれらの子どもをもつ理由の一部が、これらの困難を相殺する、あるいは上回るほど良くて豊かな生を、彼らに与えることである場合に限り、そうすることができる。この説明において、親が特定の特徴をもつ子どもをもつ理由は、彼らの決断の許容性や、彼らがつくる子どもからのあらゆる不満の妥当性について判断するとき、重要な役割を果たすだろう。(Ibid. [135-136])

このように、ワツサーマンは、見込み上の親が子どもをもつ理由は、生殖の選択を道徳的に評価する上で重要な役割を果たすものだと考えている。そして、ワツサーマンの説明に従えば、(1) 子どもが生きる価値のある生をもつことが見込まれている、(2) 愛情と適切なケアを与えることができる、(3) 子どもの利益に関係する理由から行為する、といったこれらの3つの条件をすべて満たすことができれば、基本的にどんな種類の子どもを産む選択でも(例えば、障害のない子どもを産む選択であれ、障害のある子どもを産む選択であれ)道徳的に許容されるのである。

## 2-2. ディックとジェーンのケース

例えば、ワツサーマンは、次のようなケースについて、分析を行っている。

ジェーンは、レズビアンであり、ドナーの精子による人工授精を行う予定である。彼女の親しい友人であるディックは、最近ハンチントン病により亡くなったが、彼は亡くなる前に、自身の精子を凍結させていた。ディックは常日頃、子どもがほしいと思っており、彼はその思いをジェーンと共有していた。彼は死の間際に、彼女が子どもをもつために彼の精子を利用する気があるかを尋ねた。彼女は、考えてみるとだけ伝えていた。結局ジェーンは、彼の思いを叶えることに決め、ディックと遺伝的なつながりのある子どもを産み育てることに決めた。彼女は、その子どもが、豊かで実りある人生を送り、死後に彼の生に貢献した父親について知り、誇りに思っしてほしいと思っっている。ディックは、ハンチントン病のホモ接合の優性突然変異であったため、彼の精子によってつくられる子どもはすべて、ハンチントン病を発症することになる。ジェーンは、ハンチントン病が不可避的にもたらず苦痛を伴う死のことを十分に承知しており、彼女の子どもが生きているうちに「病気が」治る可能性について、幻想をいだいていない。しかしながら、彼女は、その子どもが十分に生きる価値のある生をもつと考えている。また彼女は、その子どもが、ハンチントン病によって再起不能になったときに、彼が確実に質の高いケアを受けられるようにするための手段をもっている。(Wasserman [2009:333])

ワッサーマンは、このケースにおける見込み上の親であるジェーンが、「不正に行為している、あるいは、彼女がつくる子どもにいずれ訪れる苦しみに対して、無関心さ (insensitivity) を表しているとは考えない」(Ibid. [334])という、「態度」に着目した主張をしている。さらには、「(ジェーンの) 行為は、たとえ彼女が別のドナーの「正常な」精子を選択する「場合」に比べて、より少ない利益やより多くの苦しみを世界にもたらず見込みをもつとしても、許容されると考える」(Ibid.) という主張がなされている<sup>(2)</sup>。

確かに、このケースは、生殖の選択が道徳的に許容されるために必要な(1) (3) の条件を満たしていると言

えるかもしれない。ハンチントン病は、その病を抱える人に苦しみや制限をもたらすかもしれないが、ハンチントン病と共に歩む人生を、生きる価値のないものにするほど重篤な疾患とは言えず、ジェーンが考えるように、その人生には十分に生きる価値があると伝えるため、(1)を満たしている。また、ジェーンは、その子どもが適切なケアを受けられるようにするための手段をもってしているため、(2)も満たしている。

では、最後の(3)について、ジェーンは、その子どもの利益に関係する理由から行為すると言えるだろうか。ジェーンが子どもをもつ理由は、「彼女が、ディックとの子どもに命を与えたいからであり、たとえその子どもに、苦痛に満ちた短命の人生が待っているとしても、そうである」(Ibid.)。ワッサーマンによると、ジェーンは、「部分的にはディックのために、部分的にはディックの子どもに命を与えるために」行為しており、「子どものため」とまでは言わずとも、「少なくともその子どもの利益に関係する理由から」行為している(Ibid.)。したがって、このケースは(3)も満たしている。

以上のように、ジェーンの選択は、(1)～(3)をすべて満たしているため、道徳的に許容されると考えられるだろう。

### 2-3. 子どもの利益に関係する理由とは

前項で確認したジェーンが子どもをもつ理由の他には、どのような理由が、子どもの利益に関係する理由として考えられるだろうか。例えば、ワッサーマンは、子ども自身のためではないが、子どもの利益に関係する理由から子どもをもつと考えられる例として、「自分のアパートを手に入れるために、子どもをもつ10代の少女」や「農場を継がせて、老後は自分たちの世話をしてもらうために、子どもをもつ貧しい田舎暮らしの親」、「1人目の子どものために、2人目の子どもをもつ親」などを挙げている(Wasserman [2005:147])。ワッサーマンは、これらの例につい

て、いずれの場合の子どもも、その子ども自身のためだけにつくられたとは言えないが、その子どもがつくられた理由は、部分的には子どもの利益に関係していると考ええる (ibid. [47-148])。

これに対して、子どもの利益とは無関係だと考えられる理由としては、Wasserman [2005] では、「その子どもが、親が期待する者だからというだけの理由」や「その子どもが、家族を満足させることができるからというだけの理由」などが挙げられている (ibid. [151])。

また、Wasserman [2015] では、「自身に生殖能力があることを示すため」、「同世代の人々に置いていられないため」、「親戚を満足させるため」、「家系を途絶えさせないため」、「少子化対策のため」、「国の労働人口を増やすため」、「世界全体の利益の増大のため」といった理由が、そのような理由として挙げられている (Wasserman [2015:9])。ただ厳密には、Wasserman [2015] が挙げる理由のみによって、動機づけられるような見込み上の親は、子どもの利益とは無関係な理由から行為しているものと見なされるだろう。逆に言えば、これらの理由をもつ親であっても、同時に子どもの利益に関係する他の理由をもつのであれば、部分的には子どもの利益に関係する理由から行為していると考えることができようだろう。

## 2-4. 小結

以上のように、ワツサーマンの議論では、生殖の選択の道徳的評価をする上で、見込み上の親が子どもをもつ「理由」は、重要な役割を果たすものとして考えられる。これは、前節の見込み上の親の「態度」に着目した徳倫理学的なアプローチをとる場合にせよ、「理由」だけに着目した動機主義的アプローチをとるにせよ、重要な働きをするだろう。なお、ワツサーマン自身は、「理由」に着目するアプローチを、「態度」に着目するアプローチを否定するために提示してはいないことから、本論文では、両者はあくまで両立可能なアプローチとして見なすものとする。

また、ワッサーマンの議論の特徴として、「子ども自身のためとなる理由」だけに限定せず、「子ども自身のためだけではないが、部分的には子どものためとなる理由」、すなわち、「子どもの利益に関係する理由」について扱っている点が挙げられるだろう。これにより、かなり多くの生殖の選択について、道徳的に許容されるものとして評価することが可能となるだろう。

### 3. 見込み上の親は、子どもの利益に関係する理由から行為できるか

前節では、生殖の選択の道徳的評価をする上で、見込み上の親が子どもをもつ「理由」が重要な役割を果たすことを確認したが、ここで検討すべき問題が生じる。というのも、見込み上の親が、子どもの利益に関係する理由から行為できるかを疑わしく思う論者がいるからである。そのような論者の議論として、ハンズは McMahan [2009] の議論を紹介する<sup>(3)</sup>。

#### 3-1. マクマハンの議論

ワッサーマンは、将来の子どもの利益は、その子どもを存在させる理由としての役割を果たしうるという見解に対して、最も強い反対意見を示している可能性のある論者として、ジェフ・マクマハン (Jeff McMahan) を挙げている (Wasserman [2015:18])。実際に、マクマハン<sup>(4)</sup>は次の引用で、ある特定の利益を、特定の個人に授けることは、人が行為する理由とはなりえないという主張をしている。

もしある人が、ある個人を存在させることを選ぶならば、それは、存在するようになる個人にとって良いか

もしれないが、その利益をその個人に授けることは、ある人が行為する理由や、ある人が行為する意図とはな  
り得ない。ほとんどの場合、ある人の理由は、追加の非比較的个人影響的価値 (noncomparative individual-affecting  
value) を生み出すかもしれない。そして、その価値は、必然的に誰かに伴い、誰かにとって良いだろう。しか  
し、この利益を生み出すことは、その個人にとってより良いのではなく、「その利益を」生み出さないことが、  
その人にとって、より悪いということもない。(McMahan [2009:52])<sup>(4)</sup>

マクマハンによると、「物事が個人にとってより良い」とき、それは「個人影響的価値」をもち、「物事がある個  
人にとってより悪い」とき、それは「ネガティブな個人影響的価値」をもつが、「個人にとってより良い／より悪  
い」物事のいくつかは、本質的に「非比較的な」仕方 で存在する (Ibid. [50])。

例えば、生きる価値のある生をもった状態で存在すること、その個人にとっては、良いことである  
ように思われる (Ibid.)。しかし、個人がその利益をもたなかったら、代わりの選択肢 (その個人が存在しない選択  
肢) は、「その個人にとって悪い／より悪い」とは言えない (Ibid.)。存在しない人にとって、何が良い／悪いとい  
うことはありえない以上、存在しない人にとって、その人が存在しない選択肢が悪い、あるいは、(他の選択肢と比  
較して) より悪いと言ったこともできない。

同様に、生きる価値のない生をもった状態で存在すること、その個人にとって悪いと言えるが、代  
わりの選択肢 (その個人が存在しない選択肢) と比較してより悪いと言ったこともできない (Ibid.)。

要するに、個人を存在させるときは、利益の受け手が存在するため、「存在することは、存在する人にとって良  
い」という評価が可能だが、個人を存在させないときは、利益の受け手は存在しないため、「存在しないことは、存  
在しない人にとって悪い」という評価は不可能である。非存在についての評価が不可能である以上、存在と非存在

の比較は不可能である。つまり、生きる価値のある生をもって生まれる方がより良いという評価や、生きる価値のない生をもって生きるくらいなら生まれたいほうがましだという評価など、存在と非存在の比較を前提とした評価は不可能である。

見込み上の親が、子どもをもつ選択をするとき、そして、子どもの利益に関係する理由から、子どもをもとうとするとき、その時点では、子どもはまだ存在していない。つまり、行為の影響を受けるような利益の受け手が存在しない、非存在の状態である。先程確認したように、存在と非存在の比較は不可能である。つまり、「存在の利益を、存在するようになる子どもに授けること」は、見込み上の親が行う理由とはならず、「生まれたほうが良い（存在の利益を得たほうが良い）」という存在と非存在の比較を前提とした評価をすることはできない。したがって、マクマハンの議論を踏まえると、見込み上の親は、子どもの利益に関係する理由から行為することはできないということになる。

### 3-2. ワツサーマンによる反論

前項では、見込み上の親は、子どもの利益に関係する理由から行為することはできないと考える論者の議論として、マクマハンの議論を確認した。仮に、この議論が正しいとするならば、第2節で確認したワツサーマンの議論の説得力が失われてしまう。マクマハンが主張する通り、見込み上の親は、子どもの利益に関係する理由から行為することができないならば、どんな生殖の選択も、「(3) 子どもの利益に関係する理由から行為する」という条件を満たすことはできず、道徳的に許容されると言えないだろう。

また、ワツサーマンが主張するように、見込み上の親の「態度」について評価するためにも、「理由」が重要な役割を果たすと考えるならば、マクマハンの議論による影響は、「理由」に着目したアプローチにとどまらず、「態度」

に着目したアプローチにまで及ぶと考えられる。したがって、これらのアプローチを支持できる可能性を残すためには、マクマハンの議論に反論する必要がある。本論文では、そのような反論として、Wasserman [2015] の議論を紹介する。

ワッサーマンは、マクマハンの議論では、次の2つの主張がなされているものと理解しているようである<sup>(5)</sup>。

(1) 存在そのものは、存在する個人にとって良いが、存在そのものが、その個人にとって非存在よりも良いわけではない。

(2) 人が生殖を行う時点では、利益をもたらそうという意図を向けられる対象となる個人は、存在しない。

(Wasserman [2015:7-8])

ワッサーマンは、これらの2つの主張そのものについては、認めているものの、これらの主張が、「私たちは、子どもをつくるときに、子どもに利益を与えようと意図することはできない」という結論を支持することについては、否定的な考えである (Ibid. [8])。

ワッサーマンはまず、マクマハンの前提が誤りであることを指摘する。マクマハンは、議論の中で、利益とは、「存在そのもの」であり、そうであるに違いないと前提している (Ibid.)。これに対して、むしろここで想定されるべき利益とは、愛情や養育など、「存在を前提とする利益」であるというのが、ワッサーマンの見解である (Ibid.)。ワッサーマンによると、見込み上の親は、「家族や家庭、物質上・精神上的の安全といったより包括的な利益」を、子どもに授けようとしており、それらの利益は、「子どもが開花繁栄することが可能になるような利益」だと考えられる (Ibid. [9])。

ここでワッサーマンが挙げる「存在を前提とした利益」は、生殖の選択をする見込み上の親だけではなく、養子縁組をする見込み上の養親にも共有されうる。つまり、見込み上の養親も、見込み上の親と同じ「存在を前提とした利益」に関係する理由から、行為することが可能である。したがって、養子縁組をする時点で、見込み上の養親は、まだ見ぬ存在する子どもの「存在を前提とした利益」に関係する理由から、行為することができると同様に、生殖の選択をする時点で、見込み上の親が、まだ見ぬ存在しない子どもの「存在を前提とした利益」に関係する理由から、行為することは可能だと考えられる。

また、恋人関係や友人関係を例に考えることもできる (ibid. [14])。私たちは、恋人や友人がほしいと考えて、そのような相手を探すとき、部分的には自分の利益のために、その関係を求めていると同時に、部分的にはまだ見ぬ存在する恋人や友人の利益のために、その関係を求めることができる。同様に、私たちは、子どもがほしいと考えて、生殖の選択を行うとき、部分的には自分の利益のために、その関係を求めると同時に、部分的にはまだ見ぬ存在しない子どもの利益のために、その関係を求めることができるだろう。

このようにして、ワッサーマンは、見込み上の親が、子どもの利益に関係する理由から行為できることを示している。

### 3-3 小結

以上のように、見込み上の親は、子どもの利益に関係する理由から行為できるかをめぐる議論として、マクマハンの議論と、それに対するワッサーマンの反論を確認した。ワッサーマンの反論は、それなりに妥当なものであるように思われる。したがって、ワッサーマンの反論を支持することで、見込み上の親は、子どもの利益に関係する理由から行為することが可能であり、見込み上の親の「態度」や「理由」に着目したアプローチを支持できる可能

性を維持できると言えるだろう。

## おわりに

本論文では、生殖の選択について道徳的に評価するためのアプローチとして、見込み上の親の「態度」と「理由」に着目するアプローチを扱う先行研究の整理を行った。本論文では、あくまで先行研究の整理にとどまっているため、今回の整理を踏まえて、これらのアプローチの妥当性について検討していくことを今後の課題としたい。

## 注

(1) デグラジアとブーニンとは、非同一性問題を解決するためのアプローチの1つとして、「態度」に着目するアプローチとして位置付けられる議論を紹介しているが、彼らはいずれもその議論を積極的に支持しているわけではない。

(2) このような評価は、「最大多数の最大幸福」をもたらすことを目標とする、功利主義的なアプローチでは、まずなされない評価だと言えるだろう。「ハンチントン病の素因をもつディックの精子」と「正常な精子」のいずれかを選択できるような状況について、功利主義的な観点から考えるならば、「ディックの精子」を選択することは、道徳的に不正であり、「正常な精子」を選択することが、むしろ道徳的に要求されるだろう。

(3) Wasserman [2015]では、子どもの利益に関係する理由から行為できるかを疑わしく思う他の論者として、デイビッド・ベネター (David Benatar) が挙げられている (Wasserman [2015:16])。Benatar [2006]では、「子ども自身の利益のためにその子どもをもつことができるというのは奇妙である」(Benatar [2006:27])という主張がなされている。ベネターは、代表的な反出生主義者であり、「存在させられることは、利益ではなく、常に危害である」(Ibid. [38])と考える立場をとる。ベネターに言わせてみれば、全ての生は何らかの悪さを含む以上、そのような生をもって存在するようになることは、常に危害であると考えられる (Ibid. [29])。ベネター自身が反出生主義者であることを考慮すれば、「子どもを存在させることによって、その子どもに利益を与えることができる」とい

う前提をもつ「見込み上の親が、子どもの利益に関係する理由から、行なうことができる」という主張を疑わしく思うのも無理はないだろう。

(4) 原文の斜体箇所を傍点にて強調。

(5) なお、(1) (2) という数字は、Wasserman [2015] から該当箇所を引用するにあたって、便宜上付けた数字である。

#### 参考文献

- Benatar, D. 2006. *Better Never to Have Been: The Harm of Coming into Existence*. Oxford University Press.
- Boonin, D. 2014. *The Non-Identity Problem and the Ethics of Future People*. Oxford Scholarship Online.
- Brock, D. W. 1995. "The Non-Identity Problem and Genetic Harms: The Case of Wrongful Handicaps." *Bioethics* 9.3, pp. 269-275.
- DeCraza, D. 2012. *Creation Ethics: Reproduction, Genetics, and Quality of Life*. Oxford University Press.
- McMahan, J. 2005. "Preventing the Existence of People with Disabilities." Wasserman, D. T., Bickenbach, J., and Wachbroit, R. (eds.) *Quality of Life and Human Difference: Genetic Testing, Health Care, and Disability*. Cambridge University Press, pp. 142-171.
- McMahan, J. 2009. "Asymmetries in the Morality of Causing People to Exist." Roberts, M. A. and Wasserman, D. T. *Harming Future Persons: Ethics, Genetics and the Nonidentity Problem*. Springer, pp.49-68.
- Parfit, D. 1986. *Reasons and Persons*. Oxford University Press. (D・ハーシュマン 1998:『理由と人格』森村進訳、勁草書房。)
- Wasserman, D. 2005. "Nonidentity, Disability, and the Role of Morality of Prospective Parents." *Ethics* 116.1, pp.132-152.
- Wasserman, D. 2009. "Ethical Constraints on Allowing or Causing the Existence of People with Disability." Brownlee, K. and Cureton, A. (eds.) *Disability and Disadvantage*. Oxford University Press, pp. 319-351.
- Wasserman, D. 2015. "The Good of the Future Child and the Parent-Child Relationship as Goals of Procreation." Benatar, D. and Wasserman, D. *Debating Procreation: Is It Wrong to Reproduce?* Oxford Scholarship Online, Ch8, pp. 1-18.